

エレミヤ書 17：5～8

ペトロの手紙一 5：6～7

「神にのみ信頼する」(第一戒)

(ハイデルベルク信仰問答 第三部 十戒について 問 94～95)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編 29：2

【讚美歌】25「父、子、聖霊に」

【詩編交読】詩編 32 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55：7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】16「われらの主こそは」

【祈祷】

【聖書】エレミヤ書 17：5～8

ペトロの手紙一 5：6～7

【説教】「神にのみ信頼する」(第一戒)

<大前提>

本日から、イエスさまの救いに与ったわたしたちの感謝の生活を導く神さまの言葉、「十戒」について、一つずつ聞いていきたいと思えます。今日はその最初である、第一戒です。

『ハイデルベルク信仰問答』は、出エジプト記 20：2～3 を第一戒としています。その部分をお読みしてみます。

第一戒「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

そして信仰問答は、今日の間 94～95 で、その第一戒において、神さまがわたしたちに求めておられることを、詳しく教えているのです。

さて、この第一戒は、実は「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」というところを、十戒全体の「前文」「序文」とする考え方もあります。その場合は、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」の部分が、第一戒となります。

どちらにせよ、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」との御言葉は、この「十戒」や、一つ一つの戒めにおける大前提であり、戒めを与える根拠となる御言葉です。

神さまは、イスラエルの民に、ただこの戒めを守りなさいと、一方的に規則を押し付けたわけではありません。

神さまは、「十戒」を与えられる時に、まず御自分が何者であるか、ということをはっきりと明らかになさいました。それが、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」との御言葉なのです。

神さまは、まず「わたしはあなたの主だ。あなたの神だ」。そう宣言なさいます。

そして、「このわたしが、あなたを、エジプトの国、奴隷の家から救い出した」。そう言われて、ご自分が確かに実現して下さった、救いの事実を示されます。

神さまは、この戒めを与える以前に、すでにイスラエルの民を愛し、すでに民をエジプトの奴隷の家から、救い出して下さっているのです。

同じように、今ここで「十戒」を与えられているわたしたちもまた、神さまに遣わされた御子イエスさまによって、すでに神さまの愛を示され、罪の奴隷の家から導き出され、救いをいただいています。

神さまは、はじめに、ご自分が、わたしたちを愛して下さり、わたしたちを救い出す力をお持ちであること。そして事実、その救いの御業を成し遂げて下さったことを思い起こさせ、ご自分が信頼に足る方であることを示されるのです。

そうして、すでに与えて下さった、救いの確かな事実を示した上で、神さまは、わたし、あなた、と言って下さる、恵みの親しい関係が、ここにあることを明らかにして下さいます。神さまが、わたしの主でいて下さること。わたしの神でいて下さることを、宣言なさいます。

そして、わたしたちが、この天地万物の創造主であり、全能の神であるお方を、「わたしの主、わたしの神」、そう呼んでよいと、御自分の名を知らせて下さっているのです。

その上で、わたしたちは、神さまを愛することを求められているのです。

その上で、あなたは、このようにあなたを愛し、あなたを救い出して下さった神さまと、どのように生きていくのか。そう問われているのです。

<第一戒>

ある牧師は、十戒は、まず神さまからの愛の宣言から始まっているのだ、と語ります。それはさながら、結婚のプロポーズであると。

そして、十戒を受け取り、それに従って生きていくことは、わたしたちが、神さまの愛の意志に、自らの自由な意志をもって応答すること。そのプロポーズを受け取って、愛の約束を交わし、共に生きていくことである、と言うのです。

わたしたちは、神さまに造られたものに過ぎないのに、これほどに、わたしのことを重んじ、信頼し、愛して下さる神さまです。

だからこそ、この第一戒があるのです。「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

これは、わたしたちが、まことの唯一の神さまのみを、神とする、ということです。

「ほかに神があってはならない」と、禁止の命令として語られていますが、これは、単なる禁止事項というよりも、神さまが、「このわたしが、あなたの主なのだから。わたしが、あなたの神なのだから。わたしが、あなたを愛し、あなたを救ったのだから。あなたには、他に神があるはずがない。わたし以外のものを、神とするはずがない。あなたには、わたしをおいて、ほかに神はないのだ。」そう言っておられるのです。

また、この新共同訳聖書では、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」とありますが、とても古い、文語訳という聖書では、こうなっていました。

「汝(なんぢ)我(わが)面(かほ)の前(まへ)に我(われ)の外(ほか)何(なに)物(もの)をも神(かみ)とすべからず」(文語訳)。

「汝、我が面の前に」。つまり、神さまに愛され、神さまに救われたわたしたちは、生ける神さまの顔の御前に立って、生きている、ということです。

本当は、わたしたち人間は、神さまに背く罪のゆえに、神さまの顔を見れば死ぬ、と言われていた者でした。しかし、わたしたちは今や、イエスさまの十字架によって罪を覆われ、神さまの顔の御前に立つことが許される者となったのです。

神さまの愛する御子、イエスさまの十字架の血によって、罪から救い出され、神さまの顔の御前に立つことが許されるようになった、わたしたちです。

それなのに、その神さまの面前で、わたしたちが他の神さまを持ち出してくる。神さまの目の前で、他のものに頼り、すがり、神として崇めようとする。それは、何と失礼で、不誠実で、神さまとの信頼関係を裏切る行為でしょうか。

わたしたちには、罪の奴隷の家から救い出して下さった、唯一の、まことの、生きておられる神さまがおられるのに、このお方では足りないというのでしょうか。不満だというのでしょうか。このお方では、何か出来ないことでもあるというのでしょうか。

「ほかの神」など、この世には存在しません。でも、まことの神さまに頼り切ることの出来ない、弱いわたしたちは、自分で自分に都合の良い神を、造り出してしまおうのです。

自分の欲望を満たすために。自分の不満を解消するために。自分の弱さを補うために。手軽な安心を手に入れるために。自分に都合の良いほかのものを頼り、信じ、そして、やがては、それを神のようにして、従ってしまうのです。

まことの神以外のものを神とすること。それは、なんだか一見、人間の「自由さ」であるかのように見えますが、実は、不確かな命のないものに、支配されてゆくことです。

それは、神でも何でもありません。だから神さまは、そのようなものに頼ってはいけません。ここに、あなたを愛し、あなたを救うわたしがいるではないか。「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」。そう語られるのです。

そして、まことの神さまのみを神とするところにこそ、他のものに支配されることのない、地に足のついた、本当の自由を、わたしたちは生きることが出来るのです。

<偶像礼拝>

さて、『ハイデルベルク信仰問答』の間 94 では、この第一戒について、消極的な面、つまり、避けなければならないこと。そして、積極的な面、わたしたちが、さらに一步踏み出し、行うべきことを教えています。

まず最初に、こうあります。「問 94 第一戒で、主は何を求めておられますか。」

「答 わたしが自分の魂の救いと祝福とを失わないために、あらゆる偶像崇拝、魔術、迷信的な教え、諸聖人や他の被造物への呼びかけを避けて逃れるべきこと。」

そして、問 95 では、特に「偶像崇拝」についての説明がなされています。

「問 95 偶像崇拝とは何ですか。」

「答 御言葉において御自身を啓示された、唯一のまことの神に代えて、またはこの方と並べて、人が自分の信頼を置く何か他のものを考えだしたり、所有したりすることです。」

信仰問答は、わたしたちが拝むべき「唯一のまことの神」とは、「御言葉において御自身を啓示された」方。つまり、神の御子イエスさまにおいて、また聖書の御言葉において、ご自分を示された方のみが、唯一のまことの神である、と語っています。

そして、偶像崇拝とは、異教の神々のことだけでなく、唯一のまことの神さま以外のものに、わたしたちが呼びかけたり、より頼んだりすることは、すべて「偶像崇拝」なのだ、と教えているのです。

この、偶像崇拝を避けて逃れるべきなのは、「わたしが自分の魂の救いと祝福とを失わないため」です。

わたしたちは、神の御子イエスさまによって、唯一のまことの神さまによって、魂の救いと祝福をいただきました。罪から贖われ、新しくされ、まことの神さまと共に生きる命を与えられました。

それは、ただ神さまばかりが、驚くべきほどの多大な犠牲を被ることによって。御子イエスさまただお一人が、十字架に架けられ、苦しんで、呪われて、殺される、ということによって、わたしたちに無償で与えられた、魂の救いと祝福です。

わたしのために、ここまでして下さる神が、ほかにいるはずがありません。

わたしをここまで愛して下さる神が、ほかにいるはずがありません。

この方だけが、わたしの名を呼び続けて下さっています。わたしたちは、この声に導かれて、この声に従って歩いていけば、命の道を歩いていくことが出来るのです。

ですから、まことの神以外の、他のあらゆるものへ、救いを求めて呼びかける必要は一切ありません。

むしろ、偶像崇拝は、イエスさまの十字架の御業による魂の救いと祝福を、神さまのわたしたちへの愛を、蔑ろにし、捨て去ってしまうようなことなのです。

<この方へのみ信頼する>

ですから、問 94 は、こう続けていました。「唯一のまことの神を正しく知り、この方へのみ信頼し、謙遜と忍耐の限りを尽くして、この方へのみすべてよきものを期待し、真心からこの方を愛し、畏れ敬うことです。」

わたしたちは、ただ唯一のまことの神を正しく知り、この方へのみ信頼すべきだと。

そしてここには、「謙遜と忍耐の限りを尽くして」とあります。唯一の神のみをまことの神とする。そのことにわたしたちは、謙遜と忍耐の限りを尽くす必要があるのです。

わたしたちには、謙遜が必要です。なぜなら、わたしたちは油断をすると、すぐに傲慢になるからです。

今いただいているすべてのものは、神さまからのものであるのに、まるで当たり前のようになってくる。神さまが、わたしを守り、救って下さることが、当然のことだと思っている。

そうすると、欲が出てきたり、不満を述べたり、神さまに自分の願いを叶えさせようとさえするようになる。この神さまでは、足りないような気さえしてくる。

そのような態度は、神さまとわたしたちとの、正しい関係ではありません。

わたしたちは、神さまだけが、わたしたちを救って下さった方であることを覚え、自分がイエスさまの命を犠牲にして救い出された者であることを覚え、いつも悔い改めの心を持ち、神さまの御前にへりくだることを忘れてはいけません。

また、わたしたちには忍耐が必要です。なぜなら、わたしたちはこの世にあって、なお苦しみも、悩みも、悲しみも、試練もあるからです。

しかし、神さまは、わたしたちに必要なものも、それを得させるのに最もよい時も、すべてご存知でいて下さいます。わたしたちの一人一人のために用意された、神さまの恵みのご計画があるのです。そしてそれは、わたしたちが自分で考えるよりも、はるかに恵みに満ちた、はるかに良いものに違いないのです。

しかし、やはり、不安や苦しみの中にいるわたしたちは、今すぐ、答えや結果が欲しいと思います。それで、神さまの時を待つことが出来なくて、身近な他のものに頼りたくなる。答えをすぐにくれそうなものに、縋りついてしまうのです。

でも、わたしたちは、へりくだりつつ、忍耐しなければなりません。神さまの御手を、待ち続けなければなりません。その御手が伸ばされない、ということは決してないこと。そして、わたしたちの思いを高く超えた、神さまの素晴らしいご計画が、必ず用意されていることを、確信をもって、信じなければなりません。

なぜなら、わたしたちの神は、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」と言って下さる神だからです。

このわたしのために、神の御子の命さえも惜しまず与えて下さる、そのような神さまだからです。

あの十字架の死と復活が、わたしを救うために用意されていたのに。今のこのわたしの苦しみを、悩みを、悲しみを、試練を、どうしてこの神さまが、喜びに、恵みに、救いに、慰めに、変えて下さらないことがあるのでしょうか。

ですから、わたしたちは、希望をもって、確信をもって、神さまにのみ、すべてのよきものを期待することができるのです。

この方のみを、真心から愛し、畏れ敬うことが出来るのです。

<ますますより頼んで>

ですから、『ハイデルベルク信仰問答』は、問 94 の答えの最後の段落で、こう語っています。「すなわち、わたしが、ほんのわずかでも神の御旨に反して何かをするくらいならば、むしろすべての被造物の方を放棄する、ということです」。

つまり、わたしたちが、唯一のまことの神さまのみに信頼し続けるためなら、神さま以外のすべてのものを捨て去ります、ということです。

この世のあらゆる事柄が、わたしたちに、神さまを中心として歩むことを妨げさせ、この第一戒を破らせようとします。

わたしたちは時に、神さまよりも、自分の都合や、生活や、家族や、身の回りの事情を優先させてしまうことが、あるのではないのでしょうか。

問 95 にあったように、唯一のまことの神に代えて、またはこの方と並べて、大切にしているもの、優先するものがある。それもまた、偶像崇拜と同じであると言われています。

だから、もしそのように、神さまと並べるようなものを持っているなら、それはもう捨て去ってしまいなさい、というのです。

「すべての被造物の方を放棄する」。これは、けっこう厳しい言い方かも知れません。

でも、よく考えてみれば、すべての被造物は神さまのものであり、わたしたちは、自分の体も、生活も、家族も、仕事も、楽しみも、時間も、すべてを、神さまからいただいているのです。すべては、神さまから、恵みとして与えられているものなのです。

ですから、わたしたちは大切にするものの順序を、決して間違えてはいけません。わたしたちの主なる神さまが、いつでも第一です。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

この方が、共にいて下さるなら。この方が、わたしの主でいて下さるなら。わたしたちには、あらゆる恵みと祝福が、さらに加えて、与えられていくのです。

ですから、神さまをまこと唯一の神として生きていくことは、必死に努力したり、我慢したり、辛い思いをして、世捨て人のようになって、頑張るようなことはありません。

そうではなくて、わたしを救って下さった、その神さまの救いの御手に。愛と恵みによって支配して下さる、その神さまの救いの御手に。安心して、自分のすべてを預けて生きていく、ということなのです。

今日のペトロの手紙一5:7には、こうありました。「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです。」

この、「何もかも神にお任せしなさい」というところは、直訳すれば「何もかも神の上に投げかけなさい」となります。わたしたちの思い煩い、不安、恐れ、悩み、何もかも、神さまに放り投げてしまってよい。神さまは、そのすべてを、必ず受け止めて下さいます。

この方は、わたしたちの罪も、死も、すべてを受け止めて下さり、赦しを与え、新しい命を与え、祝福して下さいました。

ですから、これから生きていく上での重荷も、悩み苦しきも、またわたしたちの生活も、家族も、仕事も、人生も、すべてこの方にお任せするなら、神さまはすべてを御手の中において、必ず、守りと導きを与え、祝福して下さいます。

このお方は、わたしたちのことを、心にかけて下さる、お方なのです。

わたしたちを救うために、愛し抜くために、生かすために、力を尽くして、何でもして下さい、お方なのです。

だから、この十字架と復活のイエスさまが示して下さい、父なる神さまにこそ。わたしたちは何もかもお任せし、この方にのみ信頼し、この方にのみ、よきものを期待して良いのです。

そうしてわたしたちは、神さまと共に歩ませていただく、その人生の中で、ますます神さまの恵みの御業を目撃し、ますます神さまへの信頼を深め、ますます神さまの名を呼んで、祈るようになっていくでしょう。

そうして、ますます神さまを愛する者とされていく。

第一戒は、この恵みに生きる道へと、神さまが招いて下さる御言葉なのです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが、御子イエスさまの命さえ惜しまず与えて、わたしたちを愛して下さい、また罪の中から救い出して下さったことを感謝いたします。

ただあなたのみが、生きておられる、唯一まことの神です。どうか、わたしたちが、与えられた救いの確かさに立って、ますますあなたのみを信頼し、ただあなたの御名を呼び、ただあなただけを礼拝する者とされますように。

ただあなたの御手からのみ、すべてのよいものが与えられますから、ただあなたにのみ期待をして、何もかもあなたにお任せして、歩む者とならせて下さい。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 506 「すべては主のため」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 26 「グロリア、グロリア、グロリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン